

石山寺蔵涅槃図試論 - 「大乘涅槃經」による場面解釈の可能性 -

大阪大学 古谷 優子

石山寺蔵 仏涅槃図(以下本図とする)は鎌倉時代に遡る作品である。釈迦は目を開き、眼前の会衆を見つめるように横たわる。会衆は悲しみの表情を浮かべる者もあるが全体的には穏やかな様相を呈す。また牀台前には供物台、その手前には立姿の菩薩と跪く俗形が描かれる。本図が他の涅槃図と異なる特徴を持つことは先学により指摘されてきたが、その典拠は必ずしも明示されてこなかった。近年、関口正之氏は、本図が『大般涅槃經』などの序品に見られる釈迦入涅槃前の姿を描いたものであると提起された。注目すべき見解であろう。しかし、これで図様の全てが解釈なされたとは言い難い。発表者は涅槃に関するテキストを改めて通覧するという作業を行った。これを踏まえた上で、本図に描かれる特徴的な図様が「大乘涅槃經」に基づく可能性を指摘したい。「大乘涅槃經」が涅槃図の典拠(とりわけ冒頭部分)となることは既に指摘されてきたが、經典全体を概観すると、經の大半を占める釈迦の教説の合間に、今まであまり注目されてこなかった説話場面が記されていることに気付く。

本発表では、まず、供物台前の立姿の菩薩に向かう俗形に注目する。会衆はこの人物を中心に求心的に描かれ、本図を理解する上で重要だと考えたからである。さて、本図のように涅槃図で供物をのせた台を描く例は少ないが、八相涅槃図の純陀供養の場面に類似した供物台を見出せる。また京都国立博物館所蔵 釈迦金棺出現図には良く似た図様が描かれ、俗形は「純陀」と比定されている。釈迦が純陀の供養を受ける場面は二通りで、パーヴァーで供養を受ける「小乗涅槃經」に基づくものと、クシナガラで最後の供養を受ける「大乘涅槃經」に基づくものがある。本図がクシナガラの情景であることは明白であり、その典拠は「大乘涅槃經」に求められる。「大乘涅槃經」において純陀は、大乘涅槃の教理である如来常住を説き文殊菩薩を論破し、会衆と共に如来に最後の供養を成し歡喜する。本図で嘆き悲しむものと共に、供物を持つもの、手を合わせ祈るものが目立つのは、やはりこの場面が「大乘涅槃經」に基づく純陀供養を示しているからではないだろうか。このように考えると、名称不明の立姿の菩薩は純陀に論破された文殊菩薩に比定出来そうである。文殊は純陀供養後、釈迦に法を託される重要な存在であり、本図の中心を成すにも相応しい。

本発表では更に、供物台向かって右に描かれ、釈迦に向かい華籠を捧げ持ち冠に「王」と記される人物については阿闍世王の帰仏、釈迦に背を向ける若い僧侶とこれに相對する老形の男性は須跋陀羅の帰服を示したとの解釈を提起し、本図全体が「大乘涅槃經」の中でも主要な説話場面を描き出しているという可能性を指摘したい。